

2010年12月1日発行

Vol.53

ろんど

長崎県音楽連盟事務局

〒850-0056 長崎市恵美須町4-5
NBC第3ビル2F

Tel.&Fax095-820-1081

ホームページアドレス <http://www.n-rond.jp>メールアドレス nma@onyx.dti.ne.jp

「長崎の唄、長崎の音～祭」フィナーレ。中央で指揮するのが橋本剛（10/31、長崎ブリックホール）

音楽の遊び心

たとえその曲を知らなくても、ほんのひとフレーズを聴いただけで、これは誰の曲かが解ることがある。たとえば、モーツァルト。美しく駆け巡る音階は、この作曲家特有のもの。たとえば、アンドリュー・ロイド＝ウェッバー。官能的で美しいメロディーラインは、彼の数々のヒットミュージカルの舞台を思い出させる。

これは、編曲の場合でも同じ。作曲家・橋本剛さんが手がけると、カビが生えそうな古い曲でも、たちまち剛カラーにつつまれ、鮮やかに曲がよみがえる。彼の言葉を借りれば、その秘訣は音楽の遊び心。私たちの耳に届くときに、そのサウンドは心地よいジャズテイストとなる。

今年で3回目を迎えた「長崎の唄、長崎の音」コンサート。彼の存在無しでは、つくりあげることができなかっただろう。『長崎から船に乗って』では、モーツァルトのシンフォニーが顔をのぞかせ、『美しき天

然』は、5拍子の軽快なジャズナンバーに変身。そして、このコンサートのために作曲していただいた『序曲』。チェロの独奏から始まり、徐々に楽器が重なっていく音絵巻は、私たちを一瞬にして心の中の懐かしい日本の原風景へと誘う。

仕事場は名古屋だが、こよなく故郷長崎を愛し、年に何度も往復している。移動は新幹線とかもめ。なぜか飛行機嫌いの作曲家は、ピボパボと得体のしれない言葉を発し、子どもコーラスをまとめあげ、スピーチの代わりに、見事なピアノ即興演奏を披露したりもする。酒のつまみは、ホテルイカの沖漬、締めは粒の大きさにこだわる梅茶漬。作曲家・橋本剛は、長崎の宝だと思ふ。その紡ぎ出す音楽に、私たちはこれからも魅了され続けていくことだろう。

（文：堀内伊吹 写真：五十川商司）